

文政末天保初年唐船齋来砂糖考

松 浦 章

Chinese sugar imported from China by Chinese Junks in 1829-1830

MATSUURA Akira

In the Muromachi period, sugar was shipped from Ming China due to the return of Japanese ships, but in the Edo period, a large amount of sugar was imported by Dutch ships and Chinese ships that came to Nagasaki. Later, in the early 18th century, Yoshimune Tokugawa promoted the domestic production of sugar, gradually promoting the production of domestically produced sugar in various regions and increasing its production value. However, even at the end of the Bunsei era (1829-1830), 9 Chinese ships that came to Nagasaki shipped 1.3 million catties of Chinese sugar, or more than 800 tons.

Therefore, I would like to consider the import, distribution, and consumption of Chinese sugar through an analysis of trade results in Nagasaki.

Keywords: the end of the Bunsei era, the beginning of Tempo, Chinese sugar,

Tosen (Chinese Junks), Itoni-Kaisen, Sugar confectionery

キーワード：文政末天保初、中国産砂糖、唐船、絲荷廻船、砂糖菓子

- 1 緒言
- 2 江戸時代に輸入された中国産の砂糖
- 3 文政末天保初年に唐船が齋来した砂糖
- 4 結語

1 緒言

『古事類苑』飲食部十三、沙糖の冒頭に次のように記されている。

沙糖ハ、サタウト云フ。甘蔗ノ汁ヲ以テ製シタルモノナリ。初メ外國ヨリ毎ニ舶載シテ齋シ來リシガ、徳川幕府ノ時其法ヲ傳へ、我邦ニ於テモ之ヲ製スルニ至レリ、白沙糖アリ、黒沙糖アリ、白沙

糖ヲ結晶セシメタルヲ氷砂糖ト云フ。¹⁾

砂糖こと砂糖は甘蔗の汁を精製して製造したが、日本では外国からの輸入品で、徳川時代になって国産化が進められたのであった。徳川時代以前には平安時代末期に宋から僅か輸入され、室町時代になると遣明船の帰帆によって日本にもたらされたとされる。²⁾

文政六年（1823）に駿河城の加番を命じられた平戸の藩主であった松浦静山が、駿河において甘蔗が栽培され砂糖が製造されていたことについて彼の家老の見聞として次のように記している。

家老城喜作が所見聞、府中の在郷、江尻の在郷にも甘蔗を多く作りてあり。収納の節は台の上に輶輶の如にして牛に曳かせ、輶輶の畔を回し、砂糖をメ取る。家毎に如斯するとぞ。³⁾

と、静山の家老の見聞によって、駿河の府中や江尻などで甘蔗を栽培し、収穫時には牛を使って搾汁して、砂糖を製造していたことを記している。

また静山は、砂糖の普及に貢献したのは徳川吉宗であることを次のように記している。

享保の御深仁永く後世に伝ること、挙げ数ふべからず。…砂糖も種々御せはなりしが、思ふようには出来ざりしに、近來は諸国に蔓延して、紀州、遠州、房州など、これが爲に民産の倍せること幾ばくと云をしず。⁴⁾

とあるように、吉宗の治世貢献の一として砂糖の日本での普及を挙げている。静山は、文政四年（1821）より折々のことを『甲子夜話』として書き記したが、19世紀中葉には砂糖の国内生産は広く知られる事実となっていたのである。即ち吉宗（1684～1751）の享保年間（1716～1735）と松浦静山（1760～1841）が『甲子夜話』を記した時期とはほぼ100年の違いがあるが、この100年の間に日本では甘蔗による砂糖生産が普及したのであった。⁵⁾

松浦静山が『甲子夜話』を認めるようになった文政年間の末に長崎に来航した中国商船すなわち唐船が齎来した砂糖の數量が知られる記録が見られる。

そこで本論において、文政十二年（1829）から天保元年（1830）に長崎に来航した唐船がもたらした砂糖について考察してみたい。

1) 『古事類苑』 飲食部、神宮司廳、1913年3月、吉川弘文館、1971年4月、882頁。

2) 豊田武『増訂中世日本商業史の研究』 岩波書店、1952年1月第一刷、1957年8月、第四刷、46-47頁。

3) 松浦静山著、中村幸彦・中野三敏校訂『甲子夜話4』 東洋文庫333、平凡社、1978年7月、78頁。

4) 松浦静山著、中村幸彦・中野三敏校訂『甲子夜話3』 東洋文庫321、平凡社、1977年12月、295頁。

5) 松浦章「江戸時代唐船による砂糖輸入と国内消費の展開」『東アジア文化交渉研究』 第3号、2010年3月、335-357頁。松浦章『近世東アジア海域の帆船と文化交渉』 関西大学出版部、2013年10月、157-191頁。

2 江戸時代に輸入された中国産の砂糖

江戸時代に長崎に来航した唐船が、多くの砂糖をもたらしたことはすでに述べた。⁶⁾ 1647年から1653年に長崎に来航した唐船409隻によって8,607,013斤、およそ5,164トン、平均すると一隻の唐船が約12.6トンの砂糖を長崎にもたらした。⁷⁾ その後、1831年から翌1832年にかけて長崎に来航した14隻の唐船が2,057,258斤およそ1,234.4トン、平均一隻の唐船が88トンの砂糖をもたらしている。⁸⁾

しかし日本の識者の認識とは相違していた。江戸後期の農学者大蔵永常（1768～？）の安政六年（1859）の『広益国産考』第二巻、「砂糖の事」に次のように見られる。

砂糖ハ式百有余年已前にハ、高貴の人ならでハ知る者なく、下賤のものハ見たる事もなきに、元禄時分より唐黒といへる一種の黒砂糖、

安永・寛政の時分までハ唐船もちわたりしが、文化の頃よりハたへてわたらず。今用ふる黒さたうより砂細かにして上品なり。

舶来し、…⁹⁾

大蔵永常が言う「式百有余年已前」とは江戸時代初期のことになる。この頃は高貴な人々が砂糖を珍重する状況であった。その後に、唐黒すなわち中国からの黒砂糖が輸入されるようになり、安永年間から寛政年間まで輸入されていたとされる。そして漸次国産化が進んだ結果について、大蔵永常はさらに次のように記している。

其後薩摩の別島喜界大しま徳の嶋に作りいだし、大坂へはじめて七八百石づみの船一艘二積登りしを、薬種問屋ども引きうけ入札したりしよし。其後追々さかんに来るに依て、右薬種問屋ども本業ハかたはらになり、砂糖を多く取扱ふようになりしゆゑ、今は砂糖問屋とばかり唱へ来れり。寛政享和の頃紀州に多く作り出せしが、製法のくはしからざるゆゑ、白砂糖黄色にして、黒砂糖もしまりありしければ、自ら廃せし也。其後に讃岐国に作り出せしが、製法上手なれば三品の上白迄も出来て、一廉の国産となり、大坂へ出すに其代料幾万両といふ数をしらず。又日向土佐より出す。此三ヶ所ハ予（大蔵永常）が伝ふる所の製法なれば、極大白も出来、黒砂糖もしまりよく味ひも宜し。爰に駿州遠州に多く作りて江戸へ出し商ふ事夥し。然れども伝法あしければ、白砂糖白からず、赤味ありて黒の味ひあり。黒砂糖も練あげ行届ざれば、夏になれば和らかになり、白砂糖もしめりて砂をなさず。既に昨巳年（安政四丁巳、1857）の冬駿州にいたり黒さとうの夏に至りゆるくならざるやう、白砂糖も唐又は讃岐製におとらざる様をしへしかども、悪製に数年屈修したる事なれば、

6) 松浦章『近世東アジア海域の帆船と文化交渉』157-170頁。

7) 松浦章『近世東アジア海域の帆船と文化交渉』165頁。

8) 同書、170頁。

9) 大蔵永常『広益国産考』、日本農業全集第14巻、社団法人農山漁村文化協会、1978年12月、98頁。

急にハ直すまじけれども、追々白き砂糖も製し、堅き黒さたうも製するようになるべし。

文政天保の間、駿遠にて製する所の砂糖ハ、大抵江戸へ出し、売払ふに一ヶ年に四、五万両ニも及ぶべき歟。直段宜しき年ハ田に稲を作りたるより三増倍もありしよし。常に相庭にても稲を作るにハマされりとて作り弘りけれども、本田ハのぞき流水場等の新開に作り出せり。¹⁰⁾

とある。大蔵永常が『広益国産考』をまとめた安政六年（1859）より二百年以前と言え、宮崎安貞が『農業全書』を著したころで、その間に日本における砂糖事情には大きな変化が見られたのである。

喜田川守貞の『守貞謄稿』後集一、食類ノ砂糖に、

守貞云ふ、日本上古これなし、中古以來、長崎入船の蘭一種を持ち來る。蘭館の地名を出島と云ふにより、その糖を出島白と云ふ。支那よりは三種白糖を持ち來る。上品を三盆と云ひ、次を上白、下品を太白と云ふ。¹¹⁾

と指摘されるように、長崎にオランダ船によって舶載される砂糖が出島白、中国船によって舶載された砂糖は上品が、三盆これが唐三盆であり、次品が上白、下品が太白と呼称されていた。しかしその後、国産化も進展して、江戸時代後期になると、

近世、菓子用のみにあらず、一切食類にこれを用ふ。料理・蕎麦店・天ぷら用・蒲鉾にまでこれを用ふことはなはだし。¹²⁾

とまで称せられるように、砂糖が日本国内に普及するようになったのであった。

それでは、江戸時代後期の文政末天保初年に長崎に来航した唐船がどれほどの砂糖を齎來したのかについて次に述べたい。

3 文政末天保初年に唐船が齎來した砂糖

長崎の中国貿易に関する史料として『天保元年寅正月 本賣直組帳』が残されている。同書は旧長崎県立図書館の蔵書で、タテ25.7cm、ヨコ17.9cmの帳簿であり、文政十二年十二月に長崎に来航した丑四番船、五番船、六番船とそれに続く天保元年正月に来航した丑七番船、丑八番船。その後、同年六月に来航した寅一番船から四番船までの直組が記録されている。

長崎奉行所の記録として残された長崎の入港記録に相当する『割符留帳』から文政十二年十二月に来航した丑四番船から翌年の六月に来航した寅四番船までの入港の状況を述べて見たい。

10) 大蔵永常『広益国産考』、日本農業全集第14巻、社団法人農山漁村文化協会、1978年12月、98～101頁。

11) 喜田川守貞、宇佐美英機校訂『近世風俗志（守貞謄稿）』（五）、岩波文庫、岩波書店、2002年12月、125頁。

12) 同書、126頁。

丑四番船は文政十二年十二月九日に入港した。船主は在留船主の沈秋屏で脇船主は孫漁村であった。この船の信牌は文政十年（丁亥、1827）十二月四日に長崎に入港した船主金琴江が帰帆の際に受けた牌主龔順遂名義のものであった。沈秋屏は文政十二年七月八日に入港した丑一番船船主金琴江の脇船主として来航し、そのまま帰国せずにそのまま長崎唐館に在留し天保元年の寅一番船の在留船主として知られ、この船の帰帆する九月まで一年有餘にわたって長崎に滞在していた船主である。¹³⁾

丑五番船は丑四番船に遅れること一日後の文政十二年十二月十日に入港した。船主は在留船主の楊西亭と脇船主の李少白であった。楊西亭は文政十二年正月元日に文政十一年子六番船船主として来航し、その後、長崎唐館に在留し文政十二年の丑一番船主の在留船主そしてこの五番船の在留船主となった。その後は在留船主として天保元年の寅二番船、寅五番船船主と、天保二年正月も在留のままで卯四番船主となった。天保三年四月一日に帰帆し、同年十二月朔日に辰五番船船主として来航している。このことから楊西亭主は三年有餘にわたり長崎に在留していた。¹⁴⁾ 楊西亭は対日貿易港とも言える浙江省嘉興府平湖縣乍浦鎮の出身で楊西亭の名は長崎で貿易用と使用した名で、実名は楊嗣雄であったようである。¹⁵⁾ 道光二十六年刊の『乍浦集詠』巻七に「楊西亭嗣雄西亭里人」として詩を残している。江戸時代には長崎に来航する清医としても知られていた。¹⁶⁾

丑六番船は丑五番船と同日の夜に来航した。船主は顔遠山であった。¹⁷⁾ 顔遠山は文政元年九月二十日の寅四番船の財副として来航し、その後帰帆して年末の十二月十七日に寅五番船主として来航している。その後は文政二年の卯九番船船主、翌文政三年の辰二番船主、同年の辰八番船主として来航したがその後はしばらく見られず、文政十年の亥四番船船主、文政十二年丑六番船まで、不定期ながら長崎に来航している。

丑七番船は年が明けた庚寅年に来航した。この年は文政十三年であるが十二月に改元され天保元年になった。その正月十九日夜に入港し丑七番船となった。船主は周謫亭である。

天保十四年閏九月十七日付の「周謫亭吟味書類」によれば、

私儀唐國浙江省平湖縣之内乍浦港之者ニテ、父ハ先年御当地ニ罷渡候周學三ト申者ニテ御座候、私儀三拾四ヶ年以前午年ヨリ御当地渡來仕候儀ニ御座候。¹⁸⁾

と述べているように、周謫亭の郷里は対日貿易港とも言える浙江省嘉興府平湖縣乍浦鎮の出身で、父親の周學三の時代からの長崎貿易に関与していた。周謫亭自身は天保十四年（1834）以前の三十四年前の午の歳、すなわち文化七年庚午（1810）に19歳で長崎貿易に従事したようであるから、文政十二年（1829）

13) 「割符留帳」、大庭脩編著『唐船進港回棹録 島原本唐人風説書 割符留帳』関西大学東西学術研究所、1974年3月、194、200頁。

14) 「割符留帳」、大庭脩編著『唐船進港回棹録 島原本唐人風説書 割符留帳』184、188、189、195、197、201、206頁。

15) 松浦章『清代海外貿易史の研究』朋友書店、2002年1月、248頁。

16) 松浦章『清代海外貿易史の研究』247頁。

17) 「割符留帳」、大庭脩編著『唐船進港回棹録 島原本唐人風説書 割符留帳』、190頁。

18) 松浦章『清代海外貿易史の研究』251頁。

には38歳にはなっていた。この時で二十年の経験者であった。

丑八番船は、七番船の翌日正月二十日に入港した。船主は沈綺泉であった。沈綺泉は『割符留帳』によれば、文化十三年（1816）六月二十七日に子六番船船主として来航してより天保十二年（1841）二月十九日夜に入港した丑一番船の船主として知られ、¹⁹⁾ この間25年に20数度の来航が見られることからほぼ毎年のように長崎来航していた船主である。

文政十三年、天保元年の寅一番船は六月十三日に長崎に入港した。船主は在留船主の沈秋屏と脇船主の江芸閣であった。²⁰⁾ 沈秋屏は文政十二年七月八日に長崎に入港した丑一番船で来航して以降²¹⁾、同年の十二月九日に入港した丑四番船の在留船主²²⁾、そしてこの寅一番船の在留船主となった。沈秋屏は文政十三年九月付の信牌を受けて帰帆した。²³⁾ そして再び天保二年十二月十四日に長崎に入港した卯二番船船主の在留船主江芸閣の脇船主として来日している。脇船主の江芸閣は、この時までに文政二年二月二十四日に長崎に来航した卯一番船主、文政五年六月十八日入港の午一番船財副、同年の十二月十五日入港の午六番船船主、文政七年正月八日入港の未七番船の船主、同年七月五日入港の申三番船の船主、文政八年六月六日入港の酉一番船の脇船主、文政九年四月十九日入港の戌一番船の財副、文政十年閏六月三日入港の亥二番船の船主、同年十二月八日の亥十番船の在留船主、文政十二年二月八日入港の子八番船の船主となる実績を数えている。²⁴⁾ 江芸閣の来日じじょうについては徳田武氏の「江芸閣と日本文人交流年表」²⁵⁾ に詳しい。

文政十三年、天保元年の六月十四日暁に入港した寅二番船の船主は、先に触れた在留船主の楊西亭と脇船主の李少白である。²⁶⁾

文政十三年、天保元年の六月二十三日に入港した寅三番船の船主も先に述べた周諤亭である。²⁷⁾

文政十三年、天保元年の六月二十六日に入港した寅四番船の船主は在留船主の孫漁村と脇船主の陸吟香であった。²⁸⁾ 孫漁村は文政三年六月二十三日に長崎に入港した辰五番船の財副として知られ、同年の十二月二日入港の辰七番船の財副であり、その後、文政六年十二月三日入港の未四番船の財副、文政十年十二月四日入港の亥五番船の在留脇船主、文政十一年六月十七日入港の子三番船の船主、文政十二年十二月九日入港の丑四番船の脇船主となっている。²⁹⁾ 陸吟香は天保元年の寅四番船の脇船主となり以降、天保二年正月二日に入港した寅十番船の在留脇船主、その後途絶え、天保七年十一月二十九日入港の申五

19) 「割符留帳」、大庭脩編著『唐船進港回棹録 島原本唐人風説書 割符留帳』、145、223頁。

20) 「割符留帳」、大庭脩編著『唐船進港回棹録 島原本唐人風説書 割符留帳』、195頁。

21) 同書、194頁。

22) 同書、192頁。

23) 「割符留帳」、大庭脩編著『唐船進港回棹録 島原本唐人風説書 割符留帳』、200頁。

24) 大庭脩編著『唐船進港回棹録 島原本唐人風説書 割符留帳』、9-12頁参照。

25) 徳田武『近世日中文人交流史の研究』研文出版、2004年11月、262-325頁。

26) 「割符留帳」、大庭脩編著『唐船進港回棹録 島原本唐人風説書 割符留帳』、195頁。

27) 同書、196頁。

28) 同書、196頁。

29) 大庭脩編著『唐船進港回棹録 島原本唐人風説書 割符留帳』、10-12頁参照。

番船の船主として知られる。³⁰⁾

ここに述べた各船が以下に述べるように砂糖を中国から日本へもたらした。

1) 文政末天保初年に齋来された砂糖の数量

次に上記の文政末天保初年の丑四番船から天保元年の寅四番船までの九艘が齋来した中国産の砂糖について述べて見たい。

「値組帳」に記録された各船が齋来した氷砂糖、白砂糖、壺番砂糖、式番砂糖について見てみたい。ちなみに最初の丑四番船本賣の記述の砂糖類については以下のようにある。

丑四番船本賣

壺番氷砂糖	17,378斤	1斤二付	1匁1分	19,115.8匁
白砂糖	19,027斤		7分6厘	14,460.52匁
壺番砂糖	39,226斤		7分2厘	12,611.52匁
式番白砂糖	17,516斤		6分	10,509.6匁 ³¹⁾

そこで『値組帳』に見られる各船が船載してきた砂糖の数量を次に一覧表にして示した。

表1 文政末天保初年長崎来航唐船齋来砂糖本売数量（単位：斤）

長崎入港日	西 暦	番立名	一番氷砂糖	白砂糖	壺番白砂糖	式番白砂糖	合 計
文政12年12月9日	18300103	丑4番船	17,378	19,027	39,226	17,516	93,147
文政12年12月10日	18300104	丑5番船	9,163	29,097	39,223	30,874	108,357
文政12年12月10日	18300104	丑6番船	14,483	15,760	39,930	18,518	88,691
天保元年1月19日	18300212	丑7番船	一番氷砂糖 4,115 式番氷砂糖 1,038	32,014	37,276	25,108	99,551
天保元年1月20日	18300213	丑8番船	9,126	22,191	58,730	14,167	104,214
天保元年6月13日	18300801	寅1番船	30,922	36,101	111,044	56,893	234,960
天保元年6月14日	18300802	寅2番船	20,449	い白砂糖 21,310 ろ白砂糖 32,440	75,391	51,895	201,485
天保元年6月23日	18300811	寅3番船	26,495	34,238	76,083	61,803	198,619
天保元年6月26日	18300814	寅4番船	27,122	28,645	88,559	69,359	213,685

文政十二年の丑四番船から天保元年の寅四番船までの本賣の砂糖数量であるが、丑四番船が93,147斤、丑五番船が108,357斤、丑六番船が88,691斤、丑七番船が99,551斤、丑八番船が104,214斤、天保元年寅一番船が234,960斤、寅二番船が201,485斤、寅三番船が198,619斤、寅四番船が213,685斤となる。最少の丑六番船が88,691斤でおよそ53.2トン、最大が寅一番船の234,960斤でおよそ140トンとなる。この9

30) 同書、12-13頁。

「割符留帳」、大庭脩編著『唐船進港回棹録 島原本唐人風説書 割符留帳』、219頁。

31) 数字に関しては漢数字をアラビア数字に改めた。以下同様。

隻のみでその数量は1,342,709斤でおよそ805.6トン、一隻あたり約90トンを日本にもたらしたことになる。

この他に丑四番、五番、八番船と寅一番から四番船には本賣荷物の他に別段賣荷物があつた。その別段賣荷物の中の砂糖のみを抽出して整理したのがつぎの表2である。

表2 文政末天保初年長崎来航唐船齋来砂糖別段賣数量（単位：斤）

番立名	い上白砂糖	ろ上白砂糖	白砂糖	い上白砂糖	ろ上砂糖	壺番水砂糖	式番水砂糖	合計
丑4番船	5,242	885	1,493			14,300		21,920
丑5番船	4,199	143	5,587					9,929
丑6番船								
丑7番船								
丑8番船	3,693	733	3,180	7,573	220	10,196	421	26,016
寅1番船	116					21,728		21,844
寅2番船	388					23,136		23,524
寅3番船						26,539		26,539
寅4番船			438			18,113		18,551

表2で明らかなように丑四番船が32,920斤、丑五番船が9,929斤、丑八番船が26,016斤、寅一番船が21,844斤、寅二番船が23,524斤、寅三番船が26,539斤、寅四番船が18,551斤であつた。

次に文政十二年の丑四番、五番、六番、七番、八番船と天保元年の寅一番、二番、三番、四番船の砂糖数量を本賣と別段賣のみに関して次の表3にまとめた。

表3 1830年1-8月長崎来航唐船齋来砂糖数量（単位：斤）

長崎入港日	西暦	番立名	本賣合計	別段賣合計	砂糖総計
文政12年12月9日	18300103	丑4番船	93,147	21,920	115,067
文政12年12月10日	18300104	丑5番船	108,357	9,929	118,286
文政12年12月10日	18300104	丑6番船	88,691	—	88,691
天保元年1月19日	18300212	丑7番船	99,551	—	99,551
天保元年1月20日	18300213	丑8番船	104,214	26,016	130,230
天保元年6月13日	18300801	寅1番船	234,960	21,844	256,804
天保元年6月14日	18300802	寅2番船	201,485	23,524	225,009
天保元年6月23日	18300811	寅3番船	198,619	26,539	225,158
天保元年6月26日	18300814	寅4番船	213,685	18,551	232,236
合 計			1,342,709	148,323	1,491,332

以上9隻の舶載砂糖数量を合計すると本賣砂糖が1,342,709斤、別段賣が148,323斤であり、とともに合算すると1,491,032斤と約894.6トンに相当する。9隻の平均砂糖舶載量が165,670.2斤およそ99トンとなり、おそらく19世紀前半に長崎に来航した唐船は各船がおよそ100トン近い砂糖を日本に舶載してきたことが想像される。

2) 文政末天保初年に唐船が齋来した砂糖の価格

上記の各唐船が日本にもたらした砂糖の価格を次の表4にまとめてみた。

表4 文政末天保初年長崎来航唐船齋来砂糖本売の値組価格（単位：匁）

長崎入港日	西暦	番立名	一番氷砂糖	白砂糖	壺番白砂糖	式番白砂糖	合計
文政12年12月9日	18300103	丑4番船	19,115.8	14,460.52	12,611.52	10,509.6	56,697.44
文政12年12月10日	18300104	丑5番船	10,079.3	22,113.72	28,240.56	18,524.4	78,957.98
文政12年12月10日	18300104	丑6番船	15,931.3	11,977.6	28,749.6	11,110.8	67,769.3
天保元年1月19日	18300212	丑7番船	一番氷砂糖 4,526.5 式番氷砂糖 934.2	28,812.6	26,838.72	15,064.8	79,176.82
天保元年1月20日	18300213	丑8番船	10,038.6	16,865.16	42,285.6	8,500.2	77,689.56
天保元年6月13日	18300801	寅1番船	34,014.2	27,436.76	79,951.68	34,135.8	175,538.44
天保元年6月14日	18300802	寅2番船	22,493.9	い白砂糖 16,195.6 ろ白砂糖 24,005.6	54,281.52	31,137	148,113.62
天保元年6月23日	18300811	寅3番船	29,144.5	26,020.88	54,779.76	37,081.8	147,026.94
天保元年6月26日	18300814	寅4番船	29,834.2	21,770.2	63,762.48	41,615.4	156,982.28

表5 文政末天保初年長崎来航唐船齋来砂糖別段賣数量（単位：文）

番立名	い上白砂糖	ろ上白砂糖	白砂糖	い上白砂糖	ろ上砂糖	壺番氷砂糖	式番氷砂糖	合計
丑4番船	1,153,240	177,000	209,020			3,203,200		4,742,460
丑5番船	923,780	22,880	782,180					1,734,560
丑6番船								
丑7番船								
丑8番船	812,460	146,600	445,200	1,666,060	44,000	2,283,904	75,780	5,474,004
寅1番船	25,520					4,562,880		4,588,400
寅2番船	85,360					4,858,560		4,943,920
寅3番船						5,573,190		5,573,190
寅4番船			59,130			3,803,730		3,862,860

本賣砂糖価格と別段賣砂糖価格を合計すると次の表になるが、本賣価格は貨幣単位が銀の匁で記録されているのに対し、別段賣価格は銭の文で記録されている。

江戸時代には金貨・銀貨・銭貨の三貨がともに通用されていた。この三貨の交換率は常に変動していた。銀を中心とする大坂、金を主とする江戸との間には交換比率が必要であり、大坂では銀を金に交換するときの相場が金相場であり、江戸では金を銀に交換する銀相場があり、幕府は基準相場となる法定平価を御定相場（おさだめそうば）と呼称した。慶長十四年（1609）に、銀相場を金1両につき銀50目（匁）、銭相場を金1両につき4貫文と定めた。しかし相場は変動するため元禄八年（1695）年に金1両を銀60目とし、享保十八年（1732）には金1両を銭6貫500文としたが、市場相場は常に変動した。³²⁾

江戸後期の一般的価格表示として、金1両が銀60匁とし、銭に換算して4,000文が相場であったとされ

32) 小泉袈裟勝編『図解 単位の歴史辞典』柏書房、1989年12月、53頁。

る。³³⁾ そこでここでは当時の慣習を参考にして銀1匁を銭60文とした。すなわち1文を1/60匁と仮定して換算してみた。それが表のCである。それを本賣価格Aと換算価格Cとを合算したものをD砂糖総計として掲げた。

表6 文政末天保初年長崎来航唐船齋来砂糖價格（単位：匁）

長崎入港日	番立名	A 本賣合計 (匁)	B 別段賣合計 (文)	C 別段賣合計 (匁換算)	D 砂糖総計 (A + C = D)
文政12年12月9日	丑4番船	56,697.44	4,742,460	79,041.0	135,738.44
文政12年12月10日	丑5番船	78,957.98	1,734,560	28,909.3	107,867.28
文政12年12月10日	丑6番船	67,769.30			67,769.30
天保元年1月19日	丑7番船	79,176.82			79,176.82
天保元年1月20日	丑8番船	77,689.56	5,474,004	91,233.4	168,922.96
天保元年6月13日	寅1番船	175,538.44	4,588,400	76,473.3	252,011.74
天保元年6月14日	寅2番船	148,113.62	4,943,920	82,398.7	230,512.32
天保元年6月23日	寅3番船	147,026.94	5,573,190	92,886.5	239,913.44
天保元年6月26日	寅4番船	156,982.28	3,862,860	64,381.0	221,363.28

表6から明らかなように、文政12年12月に来航した丑4番船から天保6年の寅4番船までの9隻は、砂糖を最小6万7千余匁から最大25万2千余匁までの価格において長崎で取引したことになる。金貨に換算して1,129両から4,200両にも登ったことがわかる。

つぎに唐船で齋来された砂糖が、本賣分と別段賣分とで各船についてどれだけの割合を示しているかを表示してみたい。

表7 文政末天保初年長崎来航唐船齋来砂糖の本賣・別段賣比率

長崎入港日	番立名	A 本賣合計	C 別段賣合計	D 砂糖総計 (A + C = D)
文政12年12月9日	丑4番船	41.8%	58.2%	100%
文政12年12月10日	丑5番船	73.2%	26.8%	100%
文政12年12月10日	丑6番船	100%	—	100%
天保元年1月19日	丑7番船	100%	—	100%
天保元年1月20日	丑8番船	46.0%	54%	100%
天保元年6月13日	寅1番船	69.7%	30.3%	100%
天保元年6月14日	寅2番船	64.3%	35.7%	100%
天保元年6月23日	寅3番船	61.3%	38.7%	100%
天保元年6月26日	寅4番船	70.9%	29.1%	100%

表7は、これは唐船側の事情が反映された表である。本賣は中国側の荷主からの投下資本によって日本へもたらされた砂糖であるのに対して、別段賣は唐船の乗員等が出資して日本へ持ち込んだ砂糖価格

33) 三上隆三『江戸の貨幣物語』東洋経済新報社、1996年3月第1刷、同年6月第2刷、120-124頁。

である。³⁴⁾

この時期の中国側荷主は官商が王宇安であり、十二家荷主として楊嗣亨がいた。³⁵⁾ これら中国側荷主の乗員等の配当金の額が縮小して、乗員等に長崎へ持ち込む砂糖の積載量を多くさせたものと考えられる。その典型例が文政12年の丑4番船であったと考えられる。この船の場合は砂糖に限定して別段賣が本賣を圧倒していた。

3) 江戸後期の砂糖価格

それでは文政末から天保元年ころの砂糖価格はいかほどであったろうかについて考えてみたい。京・江戸・大坂の三都において呉服・両替業を経営した三井家の残した記録から整理された中井信彦編『近世後期における主要物價の動態』³⁶⁾ から考えてみたい。この書には、砂糖関係では、オランダ船舶載の砂糖「出島」と「氷砂糖」の1斤につき「匁」で示されている。

享保2年（1717）より明治4年（1871）に至る「大坂主要商品相場表」によれば、出島は文政12年（1829）2月、4月は1斤につき5.2匁、5月に5匁、6月が4.8匁、7、8月が3.8匁、9月が3.6匁、10月が3.4匁、11月が3.5匁、12月が3.3匁、天保元年（1830）2月3.2匁、3月、閏3月が3匁、4月が3.2匁、5月が3匁、6、7、8、9月が2.7匁で、10-12月が2.7匁であった。³⁷⁾

他方、氷砂糖は、文政12年2月は8匁、4、5月に7.8匁、6、7月は8匁、8、9月が7.5匁、10月が6.8匁、11月が6.5匁、12月が6.0匁、天保元年2月が6.5匁、3月が6.8匁、閏3月が7.2匁、4、5、6、7月が6.5匁、8月が6.3匁、9月が6.5匁、10月が5.8匁、11が6.5匁、12月が6匁であった。³⁸⁾

この価格推移を表にすれば、図1のようになる。

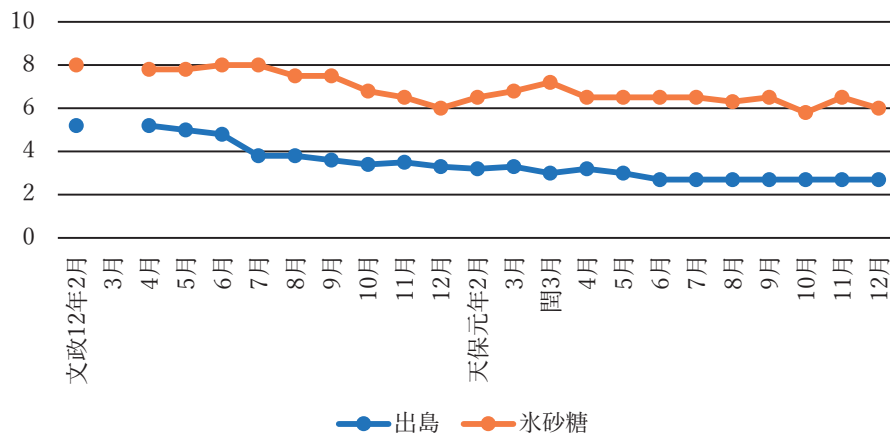


図1 文政12天保元年出島・氷砂糖価格推移表（単位：1匁価格）

34) 松浦章「清代対日貿易船乗組員の個人貿易」、松浦章『清代海外貿易史の研究』朋友書店、2002年1月、118-142頁。

35) 松浦章『清代海外貿易史の研究』155、162頁。

36) 中井信彦編『近世後期における主要物價の動態』日本学術振興会、1952年11月。

37) 同書、17頁。

38) 同書、17頁。

図1からも明らかなように、出島砂糖より氷砂糖の方が1-2倍ほど高価であったことがわかる。

さらに天保十三年（1842）における物価に関する記録が残されている。『物価書』天保十三年である。その中に砂糖に関する価格が見られる。中国から輸入砂糖の価格が記録されている。次の表のようである。

その最初には以下のように見られる。

- 一 上唐三盆砂糖壹斤ニ付 是迄四匁八分賣之處 引下銀四匁七分
- 一 同中同 同四匁三分賣之處 引下銀四匁七分³⁹⁾

表8 天保十三年（1842）の砂糖価格

	1斤につき	引下
上唐三盆砂糖	4.8	4.7
上中唐三盆砂糖	4.3	4.2
上唐雪白砂糖	2.8	2.65
上中唐雪白砂糖	2.6	2.45
唐上白砂糖	2.4	2.3
唐中白砂糖	2.3	2.15
唐太白砂糖	1.78	1.7
紅毛出島	2.8	2.79
和三盆上砂糖	3.15	3.1

この『物価書』の価格から「引下」以前の価格で検討してみると、上唐三盆砂糖が4.8匁で最も高く、それに次いで上中唐三盆砂糖4.3匁、そして和三盆上砂糖が3.15匁、次ぎに紅毛出島と上唐雪白砂糖が2.8匁、上中唐雪白砂糖が2.6匁、唐上白砂糖が2.4匁、唐中白砂糖が2.3匁、唐太白砂糖が1.78匁の順であった。

中国から輸入された上唐三盆砂糖が最高価格をしめていたことから、文政末天保初時期においても中国から唐船によって舶載された砂糖は決して廉価な品物ではなかったととがわかる。

4) 長崎から上方へ、砂糖問屋の成立

長崎において輸入された品々は、すべて幕府直轄の吏員を派遣して買い取り、商人が入札し、落札されたものは当該荷物到手板を付して大坂に輸送した。大坂でこれらを扱ったのが唐薬問屋であって、五軒屋と称された。長崎から大坂へ輸送する荷物は、ほぼ春秋二回であり、荷物が届くと直ちに相場立てがあり価格が定められた。⁴⁰⁾ 手板は送り状のようで、物品名やその数量を紙に記して付して各荷物につけられた。⁴¹⁾

39) 天保十三年『物価書』上、分冊ノ一、国会図書館蔵書（図書番号：806-11）による。

40) 「大阪商業習慣録」、黒羽兵治郎編『大阪商業史料集成』第一輯、大阪商科大学経済研究所、1935年3月、139頁。

41) 遠藤芳樹「鉛筆餘唾」、黒羽兵治郎編『大阪商業史料集成』第一輯、331頁。

長崎に輸入されたオランダ船からの紅毛荷物や中国からの唐荷物は、長崎から大坂などの上方や江戸へ輸送される必要があった。その方法には長崎から大坂へ陸路輸送する絲荷宰領と海路を通じて長崎から堺・大坂へ廻船によって輸送される絲荷廻船の二通りがあった。⁴²⁾

『堺市史』第三卷、第四編、第六章「堺と再興後の絲割符貿易」に、長崎在勤の絲年寄りは、長崎では宿老と呼ばれ、絲割符に関するほとんどの業務を宿老が行っていた。その長崎における宿老の主な職務の中に、

割符絲下附の際には、四箇所及び長崎宿老月番二人、長崎奉行所へ出頭し輸入生絲の割符書を受取る。⁴³⁾

との業務に始まり、十三項目にわたるが、⁴⁴⁾ その中の十番目に、

生絲を始め輸入貨物を上方方面へ海上輸送する場合には、堺又は大阪の絲荷廻船に依るべき規定があつたが、急送を要する際は、他船を借受けやうとする時には、堺宿老より許可を與へた。假船は堺宿老のみが支配したのである。因みに絲荷廻船は長崎に通航して、輸入貨物の積取りに従ふものであるが、堺の絲荷廻船は又堺船と稱せられ、常に御用の船印或は鎗を建て、二紺三白の幕を張る事を許され、船長は帶刀免許であつた。

船の構造に普通船と小異があり、堺船の所有者は堺市民に限られて居た。⁴⁵⁾

とのが見られる。すなわち長崎から堺・大坂への海上輸送を行ったのが、絲荷廻船と呼称された船であった。

宝暦から安永年間の長崎貿易の実情をまとめた『大意書』卷十一、「堺大坂糸荷廻船取斗大意書」に、

堺大坂糸荷廻船之儀者、前々者船數貳拾五艘に相極り、長崎唐阿蘭陀商賣荷物五ヵ所商人共入札を以買請候分上方登せ之儀者、右糸荷廻船に限り爲積登候御定に而、右船數之内五艘者追々破船難船に而右代り打立不申故、當時有船貳拾艘に相成、…⁴⁶⁾

とあるように、堺・大坂の絲荷廻船は当初25隻と定められ、長崎に輸入された中国やオランダからの輸入品は、堺・長崎・京都・江戸・大坂の五ヵ所商人に限定されて入札購入を許可され、その品々の上方への海上輸送は絲荷廻船にのみ許可されていた。しかし、海難に遭遇して破船したり、難破した船などがあっても新造はされず、宝暦から安永年間には20艘になっていた。五ヵ所商人に関してその経緯は『堺

42) 山脇悌二郎「長崎輸入品の上方輸送」、山脇悌二郎『近世日中貿易史の研究』吉川弘文館、146-163頁。

43) 堺市役所編『堺市史』第三卷、堺市役所、1930年6月、清文堂出版、1966年12月復刻版、399頁。

44) 堺市役所編『堺市史』第三卷、399-401頁。

45) 堺市役所編『堺市史』第三卷、400-401頁。

46) 本庄榮治郎編『近世社會經濟叢書第七卷』改造社、1925年12月、229頁。

市史』第四編、第三節「唐物移入とその関係諸株仲間の發達」に次のようにある。

最初から絲割符の特権を有つてゐた堺、京都、長崎の三箇所商人は、右唐物取引の特権をも有つことが出来たのである。其後寛永中に至つて、江戸、大阪の商人亦絲割符に加入の許可を得るに及び、爾來所謂五箇所商人は右唐物の賣買權とも得ることとなり、毎年長崎に至つて各貨物を目利役に吟味せしめた上入札に及んだのである。⁴⁷⁾

江戸時代以前の南蛮貿易の特権を有していた堺を初め、京都、長崎そして後に追加された江戸、大坂を加えて五箇所商人となつたのであった。

長崎に輸入された唐貨物のみならずオランダ貨物の多くはともに海上輸送を行っている。絲荷廻船は堺船とも称せられていたように、古くから堺の人々に限定されていたが、大坂の人も加わるようになる。⁴⁸⁾『堺市史』第四編、第三節に、

唐物中の最も主要品であつた藥種は、神明、宿屋、材木町邊に多くの仲買店舗を並べて賣買せられてゐた。然るに、元禄以降は堺は港灣の埋没につれて廻船の出入不能となり、右長崎廻航船は多く大阪に入港陸揚げせらるゝ事となり、享保頃から大阪に於ても問屋の許可を見るに至つたのである。即ち初め絲反物問屋、二、三年後唐藥問屋が設けられた。⁴⁹⁾

とあるように、堺が長崎からの輸入品の陸揚げが中心であつたが、堺港灣の土砂堆積により、廻船の入港が困難となり、大阪へその地位が引き継がれた。さらに同書に、

斯くして、爾來極めて小部分を除く外、堺の商人は大阪入港の貨物を同地より一旦堺に輸送して然る後之と取引するやうな方法を執つてゐたのである。茲に於て、絲割符商人として、五箇所商人の首位にあつた堺商人ではあつたが、享保以後は殊に其特権を維持することが出来ず、之に反して大阪は長崎商人を除く外の四箇所商人の貨物を全部一旦入港せしめて、之を荷分けする位置を保有することゝなつたので、自から巨然たる勢力を有するに至つた譯である。⁵⁰⁾

とあるように、享保年間以降、長崎から上方に海上輸送された輸入品は大坂に一点集中して陸揚げされるところになつたのであった。その後、享和三年（1803）閏正月より長崎において落札された唐物は大阪の他に京都、堺への直送も許可された。⁵¹⁾

47) 堺市役所編『堺市史』第三卷、462頁。

48) 黒羽兵治郎「唐紅毛荷物の上方輸送」、黒羽兵治郎『近世の大坂』（日本經濟史研究所研究叢書第17冊）有斐閣、1943年11月、133-149頁。

49) 堺市役所編『堺市史』第三卷、463頁。

50) 堺市役所編『堺市史』第三卷、464頁。

51) 堺市役所編『堺市史』第三卷、466頁。

幕末の嘉永元年（1848）十二月付の糸荷廻船を運航していた大坂の河邊七兵衛と堺の高槻平次郎の連名で五カ所商人に宛てた「乍憚口上」によると、

長崎表唐紅毛御拂荷物積登之儀、慶長年中より御用相勤來、…御大切之御荷物ニ處、水揚げニ相成候ニ付、何卒程能取締出來候様相祈居候、…⁵²⁾

とあるように、糸荷廻船は長崎から上方への海上輸送を慶長年間（1596-1614）より担当していた重要貨物の輸送を行っていたのであった。

天明元年（1781）に唐物抜荷不正品の取締のために、唐物取扱商人を取締の役を申し付けられた上に株仲間とされ、砂糖も舶來品であるため、これを扱う商人も株を定められた。長崎から大坂・堺両所の唐物問屋へ届けられた砂糖はすべてこの仲間において買い取ることとなったことから、この仲間が砂糖仲間株と呼称された。このころは和製の産出高が多くなく、文化・文政の頃に増加して舶來品を圧倒するようになり、和製砂糖問屋も知られるようになる。⁵³⁾

砂糖問屋はもともと唐薬問屋の商域から分離したもので、天保五年五月に株取立となり、その数83軒あった。しかしその問屋数は漸次衰微傾向にあった。⁵⁴⁾

長崎から大坂に運ばれてきた舶來砂糖の水揚げは、大坂の道頓堀の北側、長堀の南側、西浜の東側、西横堀の西側にのみ限定されていた。その他で水揚げするものは抜荷として没収された。唯一兵庫津のみにおいて少量の水揚げが認められていて兵庫廻しと称せられたが、その他の地での水揚げは一切認められず、大坂のみが運搬をつかさどっていた。⁵⁵⁾

これらの輸入砂糖はどのように消費されたかについて、その一端を知る記録が『長崎會所五冊物』二「唐船商賣荷物元拂等大意譯書付」の「唐方商賣内諸除荷物并出銀割相極候荷物譯書」に見られる。

御菓子屋除砂糖之儀者、壹ケ年御定金高六百六拾兩之内、五百兩者大久保主水、百六拾兩者虎屋織江買請被仰付、金壹兩五拾八匁替ニシテ、此銀三拾八貫貳百八拾目之内四貫六百貳拾目者、紅毛砂糖ヲ以買請、三拾三貫六百六拾目ハ唐方氷砂糖・上白砂糖・中白砂糖、年分拾三艘商賣之時、船、持渡、品合宜口ヨリ元代貳割増ヲ以商賣内買請被仰付來候處、寛政二戌年落札半直段ヲ以爲御買被仰付、同三年亥年右御菓子屋買請差止められ、御春屋直製被仰出、御菓子屋共買請來候元代金六百六拾兩分之内、御用砂糖之分者、其時、高木菊次郎殿ヨリ被御申立、會所ヨリ請込、御同所ニテ御用物ニ准、御差立相成、代銀之儀者元代五割増ヲ以調進可仕旨被仰渡候處、同五丑年大坂伏見屋安兵衛・鼈甲屋利兵衛ヨリ申者依願、右兩人エ御砂糖爲登方等一式御請負被仰付、渡方之儀者、元代五割増九百九拾兩分之内砂糖年分三度ニ割合、前、御菓子屋共エ相渡候振合ヲ以、當所名代之者エ相

52) 黒羽兵治郎「唐紅毛荷物の上り輸送」、黒羽兵治郎『近世の大坂』144頁。

53) 「大坂商業習慣録」、黒羽兵治郎編『大阪商業史料集成』第一輯、124-125頁。

54) 「大坂商業習慣録」、黒羽兵治郎編『大阪商業史料集成』第一輯、127頁。

55) 黒羽兵治郎編『大阪商業史料集成』第一輯、128頁。

渡、右元代五割増之儀者、於當所相渡候當日ヨリ五十日目限、兩人之者共ヨリ大坂銅座エ相納來申候。然ル處、文化元年子年右請負人共依願、請負被差免、會所引請ニ被仰付、右元代金六百六拾兩之内、唐方砂糖之分者、半高宛春秋兩度ニ割合、商賣之節引分荷造船積仕、江戸長崎屋源右衛門エ宛差廻申候、將又、右御菓子砂糖之儀、是迄御定高六百六拾兩分ニテ者及不足、御用支ニ相成候ニ付、外ニ元代金百兩分相増調進仕候様、同年九月御手頭ヲ以被仰渡、調進仕來候處、文政十一年子年至り、向後紅毛砂糖ハ御用ニ不相成、唐方ニテ調進仕候様被仰渡、翌十二年丑年ヨリ調進仕、且又、右七百六拾兩御極高調進之外、壹ケ年金貳千五百兩分、商人落札直段ニ三歩銀ヲ加御買上被成、砂糖引分高二應し決減并難船・海失等有之候テも、何方之場所ニも不拘、代銀御渡方ニ相成候旨、天保八酉年被仰渡、翌九戌年ヨリ春秋兩度ニ割合、砂糖品合・斤高之儀者、御注文之上落札直段高下ニ随ひ、増減を以商賣之節引分ケ、御菓子砂糖一同調進仕、商人落札直段ニ三歩銀ヲ加、御買上ニ相成、代銀取立荷物惣拂銀之内ニ相籠り候ニ付、元代出銀之仕譯書載不仕候、尤諸雜費・運賃銀別段御渡相成申候。⁵⁶⁾

この記述の最初に、菓子のため砂糖の一手買を認められた大久保主水および虎屋織江について見てみたい。

大久保主水は、もともと徳川家康の三河以来の家臣で大久保藤五郎と言った。家康が江戸に居城を設けた際に、江戸水道の開発を命じられ、江戸に良水を見つけたことから、家康から「主水」と名乗ることを認められた。大久保主水は菓子の製造を好み、家康にも菓子を献上し、幕府御用達の菓子司として子孫が代々この職を世襲したとされる。⁵⁷⁾

この大久保主水に関する「大久保主水由緒」が残されている。『續視聽草』第二集九に以下のように見られる。

長崎表の砂糖直買被仰付候御由緒、可申上旨被仰渡、則左ニ奉申上候。

大久保左衛門五郎忠茂五男

本國三河 生國三河 大久保藤五郎忠行

權現様へ奉仕、三州上和田ニ一家一所ニ罷在候、…小石川水道見立候ニ付、爲褒美主水ト申名被下置候、御菓子御用之義ハ、藤五郎常ニ餅拵上候奉行相勤罷在候、夫ヨリ御菓子自分宅ニテ拵上、年始之御禮御菓子献上、獨禮申上、御紋付時服拜領仕候。慶長十九年正月五日、江戸於御城、權現様御膳召上候節、御献上ニ、始テ主水菓子ト名乗申候。此御吉例今以相殘申候。右主水義、百五十八年已前、病死仕候。跡御菓子御用之所、主水實子無御座候付、後家日室ニ被仰付、台徳院様 徳川秀忠 御代、大猷院様御代 徳川家光 迄、尼ニテ御菓子差上申候、其砌主水御菓子御用絶不申候様ニと被仰付、藤五郎十右衛門養子仕、主水と相改御用相勤申候、其節右之御由緒を以、於長崎表御砂糖直買被仰付、年々奉請取候。

56) 長崎縣史編纂委員會編『長崎県史 史料編第四』吉川弘文館、1965年3月、54-55頁。

57) 村井益男「大久保藤五郎」、国史辞典編集委員会編『国史大辞典』第2巻、吉川弘文館、1980年7月、547頁。

右之通御座候。以上。

牛五月⁵⁸⁾

とある。大久保藤五郎は菓子造りが上手であり、家康に献上して喜ばれ、拝命した名の主水により主水菓子として御用菓子の扱いを受けた。主水が没して以後もその寡婦となった日室が同様に第二代將軍秀忠、三代の家光にも献上していたが、養子藤五郎十右衛門の代になっても、徳川將軍家への御用菓子として献上が継続していた。そのため、長崎に輸入された砂糖の直接購入が許可されたのであった。

同様に菓子職として徳川家へ献上したのが、次ぎに述べる虎屋織江である。先の「大久保主水由緒」に続いて次の記述が見られる。

本國三河 生國武蔵 長谷川茂左衛門

乍恐權現様御入國之砌、飯田町眞草原ニテ御座候、田安臺エ被爲成、先祖長谷川茂左衛門被召出、御直ニ御尋之上、御上意ニテ、當所之名主役被爲仰付、御杖之御先ニテ地面拜領仕、其後年頭父子共奉目見、扇子献上仕候、元來茂左衛門儀、菓子職仕居候ニ付、主水方故障之節ハ、御菓子被仰付奉差上候處、貞享四卯年、主水同様ニ御膳御菓子被害仰付、奉差上候、右御由緒を以於長崎御砂糖直買被仰付、年々奉請取候、以上。

五月

虎屋織江⁵⁹⁾

とある。長谷川茂左衛門が、家康が江戸に到った飯田町眞草原の名主として命じられ、茂左衛門が菓子職であったことから、大久保主水が菓子の調達が出来なかった際の、補助的に菓子を研究していた。ところが貞享四年（1687）よりは、幕府の主水家とともに「御膳御菓子御用」なり、長崎に輸入された砂糖を直接購入が可能となったのであった。長谷川茂左衛門と虎屋織江との関係については記されていないことから、長谷川家を継承したのが虎屋であったものと思われる。この虎屋織江が、現在まで菓匠虎屋として知られる株式会社虎屋（黒川家）との関係は不明である。⁶⁰⁾

以上のことから、以上の経緯から、大久保主水及び虎屋織江が長崎輸入の砂糖を優先的に購入できたのであった。この方式は寛政三年（1791）まで行われた。

寛政五年（1793）以降は、大坂の伏見屋安兵衛と鼈甲屋利兵衛からの申請により両者に輸入砂糖の購入と堺・大坂への輸送卯について請け負わせたのであった。その価格は「元代五割増九百九拾兩分之砂糖年分三度ニ割合」と、大久保主水・虎屋織江等への売り渡し価格の660兩の5割増しの990兩で、年に3回に分けて売り渡すこととなった。

『長崎會所五冊物』二「唐船商賣荷物元拂等大意譯書付」に「御菓子屋除砂糖之儀者」とある「除物」であるが、明治44年（1911）の『大阪市史』によれば、

58) 内閣文庫所蔵史籍叢刊特刊第二『視聽草』第十卷、汲古書院、1985年10月、319頁。

59) 同書、319-320頁。

60) 社史編纂委員会編『虎屋の五世紀～伝統と革新の経営～通史編』株式会社虎屋、2003年11月、48頁、註（10）参照。

長崎表唐薬落札の内、龍腦・麝香・辰砂・砂糖類其外品々除物と稱する分あり、⁶¹⁾

とあり、砂糖は除物として特定商品扱いを受けていたことがわかる。さらに、

砂糖類・蘇木。水銀・鈇丹・胡椒・漬類・象牙。鼈甲・丸簾・沈香・白檀・紫檀の類は本商人并に唐薬問屋へ積登せ、…唐薬問屋より何方へなりと一筋に賣渡すことゝすべし。⁶²⁾

と見られるように、砂糖は長崎から大坂の唐薬問屋へ直接輸送されたのであった。

その後の変化について、『大坂商業習慣取調書』六、砂糖商によれば、

堺筋組砂糖商は、天明元丑年幕府唐物抜け荷不正の品取扱不相成、右取締として該品賣買取扱候商人、夫々御取調之上、株仲間御定に相成候際、砂糖商は舶來砂糖、長崎本商人より大阪・堺兩所唐物問屋株商へ廻着之砂糖は、悉皆砂糖商え買取居候定に相成、砂糖仲間株と名稱御定相成、…⁶³⁾

とあるように、天明元年（1781）に幕府による唐物抜け荷不正の品を扱わないようにとのことから、取締のために株仲間を組織させ、砂糖商は外国輸入品として長崎の本商人から直接大坂や堺の唐物問屋に送付され、その砂糖を取り扱う商人を砂糖仲間株と定められたのであった。

その砂糖を扱った仲買商は、大坂の堺筋に集中していた。『守貞謾稿』卷五、生業、「堺筋ノ砂糖中買及ビ木綿屋」によれば、

堺筋ハ南北ノ名也。砂糖中買ハ二百餘戸アリ。各皆白黒及ビ和製、來舶トモニ商フ。大坂ハ、砂糖中間、官許也。⁶⁴⁾

とあるように、大坂の堺筋に砂糖仲間が集中し200余戸あり、国産の砂糖も輸入砂糖も扱っていた。

その後、文化から文政年間にかけて日本国産の砂糖の生産量が増大したことから、天保五年（1834）には新たに和製砂糖問屋が誕生している。⁶⁵⁾

そして大坂に集荷された輸入砂糖は、大坂から全国に散荷したが、とりわけ大消費地であった江戸へは廻船問屋を通じて廻船で運ばれた。『守貞謾稿』卷五、生業、廻船問屋に、

諸国回船多シト雖ドモ、運賃ヲ以テ漕スルハ、大坂ヨリ江戸ニ下ルヲ第一トス。是亦大坂ヲ本トシ、江戸ヲ末トス。其中ニ二種アリ。酒樽ヲ積ムヲ樽船ト云。其他ノ諸買物ヲ積ミ漕スヲ菱垣廻船ト云。

61) 大阪市役所編『大阪市史』第一卷（全八卷）、大阪市、1911年9月初版、清文堂出版、1965年4月復刻版、1117頁。

62) 同書、1119頁。

63) 黒羽兵治郎編『大阪商業史料集成』第二輯、大阪商科大学経済研究所、1935年3月、83頁。

64) 朝倉治彦・柏川修一編『守貞謾稿』第一卷、東京堂出版、1992年9月、108-109頁。

65) 黒羽兵治郎編『大阪商業史料集成』第二輯、83頁。

此船ハ船周リノ垣ノネヲ菱ニ組ム故ニ名トス。他船ハ格子也。

此二船ヲ以テ大坂二十四組ノ商家ヨリ出ス、諸物ヲ運賃ヲ以テ江戸十組ノ買店ニ達ス。⁶⁶⁾

とあるように、大坂から江戸へ諸物を積載して輸送する菱垣廻船が使われた輸送されたようである。

江戸に送られた砂は、江戸十組の商人が扱った。『守貞謄稿』巻五、生業に、

十組ト云ハ、塗物店、…酒店以上ヲ云。…

右ノ内、酒ハ樽船ト号ス。大坂ヨリノ廻船ニ積ミ下リ、其他ハ菱垣船ト云大坂船ニ積テ、江戸ニ来ル諸物此十組ト云。定額ノ外、大坂ヨリ船積テ直買スルコトヲ禁ズル也。⁶⁷⁾

と記しているように、大坂から菱垣廻船で送られた輸入砂糖は、江戸においては江戸十組に属する商人によって販売されていたのであった。

江戸へ輸送された輸入砂糖はどのように消費されたのであろうか。その最大の消費地は江戸城の将軍家であった。文化、文政期（1804-1829年）であるが、御菓子製法のために砂糖が一日1,000斤を消費し、一年では32万斤に上ったとされる。⁶⁸⁾ 現在の換算によれば一日の消費額が600kgとなり、一年では192トンになる。このように大量の砂糖が消費された計算になる。

江戸城内において砂糖が消費されたわけではなく、将軍が家臣に菓子を下げ渡したりするのにも使われていた。⁶⁹⁾ さらに江戸だけではなく京都の朝廷や公家など、そして各藩の諸大名も砂糖を使用した菓子を好んだのであった。⁷⁰⁾

その他、庶民の間にも砂糖文化は拡大し、さまざまな食品に砂糖が使用されるようになった。⁷¹⁾

5 結語

室町時代には遣明船の帰港により中国から砂糖が舶載されていたが、江戸時代になると長崎に来航するオランダ船や唐船こと中国船により大量に輸入される。その後、18世紀初期に徳川吉宗が砂糖の国産化を推進し、しだいに各地で国内産砂糖の生産が促進され、その産額も増加していった。⁷²⁾ しかしそのような時期の文政末天保初に長崎に来航した唐船によって舶載された中国産砂糖の数量等について考察してきた。文政末天保初（1829-1830年）においても長崎に来航した9隻の唐船が舶載した中国産砂糖は130万斤、およそ800トンを超えていた。先の表1に示したように、文政十二年十二月九日に長崎に入港した丑4番船それに続く丑5番、6番、7番、8番船そして天保元年六月に入港した寅1番船それに続

66) 朝倉治彦・柏川修一編『守貞謄稿』第一巻、117頁。

67) 朝倉治彦・柏川修一編『守貞謄稿』第一巻、111頁。

68) 松浦章『近世東アジア海域の帆船と文化交渉』関西大学出版部、2013年10月、183頁。

69) 黒川光博『虎屋 和菓子と歩んだ五百年』新潮新書132、新潮社、2005年8月、2019年11月4刷、73-74頁。

70) 社史編纂委員会編『虎屋の五世紀～伝統と革新の経営～通史編』25-44頁。

71) 松浦章『近世東アジア海域の帆船と文化交渉』184-190頁。

72) 松浦章『近世東アジア海域の帆船と文化交渉』176-184頁。

いた2番、3番、4番船の8艘の唐船が舶載した中国産砂糖は各船の本賣のみで1,491,332斤、およそ894.8トンに及んだのである。その他に別段賣があり合計で1,000トンを越えていたのであった。

これらの砂糖は、砂糖専門商によって、絲荷廻船と呼称された弁才船によって堺・大坂に輸送され、さらに大坂の砂糖商を経由して菱垣廻船に積み替えられて大消費地である江戸に輸送されたのであった。

輸入中国産砂糖は、江戸幕府の御用を預かる菓子匠のもとに買い取られ、高級和菓子の重要な材料になったと考えられる。その砂糖の大量消費の顧客が江戸城の徳川家や今日では朝廷や公家そして諸大名に及んでいた。

さらに輸入中国産砂糖とともに国産の砂糖も増加して、江戸時代の庶民には菓子をはじめさまざまな食品に砂糖が流通するようになったのであった。⁷³⁾

73) 同書、184-190頁。